（別紙２）

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名　　片岡　啓

本論文は，バラモン教ないしヒンドゥー教の最高聖典たるヴェーダの権威を絶対視し，ヴェーダ聖典およびヴェーダ祭式の解釈学の伝統から発展しつつ，次第に哲学（ダルシャナ）の性格をも帯びるに至った，ミーマーンサー（祭式教学）というインド土着の学問に正面から取り組み，ミーマーンサーの祭式行為論の展開を，bhāvanā(生ぜしめる働き）という概念装置の分析を中心に据えて，該当資料の綿密なテキスト校訂作業を踏まえつつ解明しようとしたものである。

第１章ではまず，従来のミーマーンサー研究の歴史を，祭式行為論との関連から網羅的かつ批判的に概観し，また研究対象である二人のミーマーンサー学者，シャバラとクマーリラの先行研究を，その生存年代の問題を含めて詳細に描出している。豊富な情報量に加え，南北インドにおけるミーマーンサー研究の系譜の相違や，祭式中心主義と人間中心主義の対立軸を据えるなど注目すべき視点を含み，この研究史自体が画期的な業績をなしている。研究史概観の総括として，着実な原典研究とそれに則した思想史研究の欠如・不足を指摘し，それが同時に本研究の位置づけをなしている。すなわち，本論文第２章では該当資料のテキスト批判校訂，第３章では同箇所の訳注研究，そして第４章では祭式行為論の中枢をなす幾つかの理論・概念の歴史的展開の再構成を試みている。

第２，第３章で対象としているテキストは，ミーマーンサー学の根本テキスト『ミーマーンサー・スートラ』（紀元前２世紀頃）に対する現存最古の注釈書『シャバラ注』（６世紀）および同書に対するクマーリラ（７世紀前半）の複注『タントラヴァールッティカ』であり，その中の第２章第１節の冒頭部分が精査対象となっている。ここは，ミーマーンサーの祭式形而上学の中心概念としてシャバラ以降，登場，発展する bhāvanā（「何かを生ぜしめる働き」）についてまとまった論述が展開される箇所であり，片岡氏はそれぞれ１４写本と８写本を，写本系統の問題等に微細な注意を払いつつ批判校訂を行った。インド哲学文献は未だ信頼しうる校訂テキストが極めて少ないが，氏の作業は極めて厳密な H. イサクソンのヴァイシェーシカ・テキスト校訂研究の方法に則したものである。また第３章の訳注研究では錯綜した議論の筋道を明確に示し，かつ詳細な注記を付して，語法上の問題や概念の分析などを，広く関連諸文献を参照しつつ文献実証的に解明。さらに，言外にある注釈者の意図にまで迫らんとする試みもなしている。

最後に第４章では，第３，第４章の成果を踏まえ，根本テキストの段階ではなかった bhāvanā という概念をいかなる形でシャバラがうちたて，根本テキストに読み込んだか，そしてクマーリラはその概念をいかに発展させたかを論じているが，そのほか根本テキスト段階にまでさかのぼる，バーダリとジャイミニの祭式行為の目的をめぐる対立の跡づけ，およびシャバラ以前にその断片資料が，ミーマーンサー以外の文献に見いだされる「ダルマ開顕説」の再構成を行い，『ミーマーンサー・スートラ』からクマーリラにいたる祭式行為論の展開に，かなり明確な見通しを与えるに至っている。

分析対象（批判校訂・訳注）のテキスト資料が未だ狭く限定されている点や，仮説の検証がなお不十分と思われる点が二，三指摘しうること，あるいはインド土着の特殊な概念・思想文脈を，比較思想的視点等の導入により，より普遍的な地平に引き寄せる必要性な

どは，今後の課題として残されてはいるが，総じて本論文は，詳細な先行研究概観，厳密なテキスト校訂，正確な原文読解，明快な内容解説，そして広範な関連資料精査を踏まえた思想史（概念史）研究のいずれをも兼ね備え，世界のミーマーンサー学の現況に照らしても，確実に一級品のレベルに達した画期的な労作であり，博士（文学）の学位を授与するにふさわしい研究であると判断する。